フィールド（現場）からの風 ⑥

宮田守男

新しい今に想いを抱こう

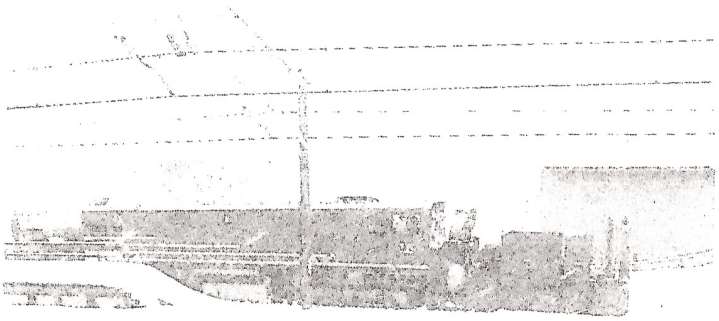
今日は二十四節気の1つである「小寒」。この日から寒の入りで約1カ月間は「寒中」と呼ばれ、厳しい寒さが続くので健康には十分な留意が必要だ。新年と言っても、暦の約束事にすぎないが、始まりの朝は改めて平和や幸いを祈ってしまう。だが年齢を重ねるにつれ1年が短いと感じるようになった。

そんな心境を歌った詩を北海道新聞のコラム卓上四季さんが紹介した。その詩は川崎洋さんの「いま始まる新しいいま」だ。「心臓から送り出された新鮮な血液は　十数秒で全身をめぐる　わたしはさっきのわたしではない　そしてあなたもわたしたちはいつも新しい」「きのう知らなかったことを　きょう知る喜び　きのうは気がつかなかったけどきょう見えてくるものがある」。誰もが何がしかの課題を持ちながら日々を過ごしている。1年の長短を嘆いても仕方がない。今年も何気ない日常の中で幸せをかみしめて行かなくてはと思わせたメッセージだ。

「大晦日の夜から元旦の朝」「元旦の夜から2日の朝」「2日夜から3日朝」と3つ説が混在していたが、明治の改暦後は「元日から2日」とする人が多くなった初夢、みなさんはどんな初夢を見たのだろうか。縁起がいいのは「一富士二鷹三茄子」。諸説はあるが、富士は「無事」、鷹は「高い」、茄子は「ことを成す」の掛詞になっているという。続くのが「四扇、五煙草、六座頭」。扇は末広がりで子孫繁栄や商売繁盛、煙草は煙が上がるから運気上昇、座頭は琵琶をひく盲目の僧のことで「毛が（怪我）ない」。だが今は社会情勢も大きく変化して夢に見ることは難しい。日々目まぐるしく激動している状況で暮らす私たちが、縁起物から初夢に想いを寄せにくい中で、誰もが幸せに包まれた夢を見られるよう望むばかりだ。

文豪の谷崎潤一郎は「かわいい子には旅をさせよ、との古い考えを捨てるべきでない、旅は自分の家にいるような便利さを追わず、困難を耐える習慣を養うべきである」と語り、自分が旅に出る時、あえて船や汽車に乗って三等旅行を試みて違った世界を覗き、いろいろな人との思いがけぬ出会いを楽しんだという。旅行がコロナ禍で困難だと諦めず、継続可能な地域の新しい着眼点発見と己の生甲斐のため、今年こそ旅に出掛けたいものだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



大糸線で活躍するラッセル機関車。今冬も活躍を期待したい